

たまのよこやま

(財)東京都埋蔵文化財センター報 No.7 昭和61年1月1日

特集

多摩ニュータウンNo.513遺跡



いきいきとして、優れた調査研究力を持つ埋蔵文化財センターをめざして

新年、あけましておめでとうございます。本年は、センターにとって発展の第二期へのスタートの年であります。

昨年は、法人創立五周年を迎え、本調査面積は十七ヘクタールに達し、また優れた新施設が完成し、さらにセンターの長期構想中間報告もまとめられました。

これらのことは、東京都をはじめ関係諸機関の多大な御支援と、センター役職員の一致協力による懸命な努力の結果と深く感謝申し上げます。

第二期スタートとなる昭和六十一年のセンター運営の基本方針は「いきいきとして、優れた調査研究力をもつ埋蔵文化財センターをめざして」として、次の重点目標により活動を展開してまいりたいと考えています。

第一 優れた調査研究活動の推進（経営管理、調査研究へのコンピュータシステムの導入、各種研究、研修活動の奨励等）

第二 埋蔵文化財の都民文化向上への活用（公開展示、記録映画、現地説明会、学校・社会教育への協力等）

第三 0災害をめざして労働安全対策の徹底（安全衛生推進委員会の活動、安全管理規程制定等）

第四 明るく、いきいきとした職場の確立（全員一致協力体制、職員の文化活動等）であります。

この目標により、よりよい埋蔵文化財センター実現のため、職員全員の深い理解と、積極的な協力を御願ひし皆様の活躍を心から御祈りします。

（昭和六十一年一月四日 仕事始めの言葉「要旨」）

常任理事 高橋 初男

トピックス

全国埋蔵文化財協議会

全国埋蔵文化財法人連絡協議会（昭和五十五年設立、加盟団体現在三八）の昭和六十年年度第二回役員会が十一月七日午後、当センターで開かれました。当日は北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州の各地区の役員、職員約三十名が出席され、研修その他各プロックの活動状況報告、昭和六十一年度事業計画や予算などの協議が行われました。また、研究活動として、今後の埋蔵文化財調査等に電子機器等の導入についての検討がとりあげられ、そのための体制についても熱心な話し合いがありました。翌八日には、「埋蔵文化財の調査研究事業の充実について」文化庁、文部省、大蔵省などの関係当局に陳情を行い散会しました。

第6回遺跡見学会

東京都埋蔵文化財センター



No. 513遺跡見学会

1では、毎年遺跡見学会を行い、一般都民の方々に調査研究の成果の一部を公開しておりますが、今年度も十一月十日（日）、稲城市大丸にあるNo.513遺跡で行いました。当日は曇りがちの天気でありましたが、二百名を超える方々が参加され、奈良時代の瓦窯跡や出土品を中心とした調査員の説明に熱心に耳を傾けていました。（本遺跡については、本号の「特集」参照）

昭和60年度の三大遺物

昨年のセンターの調査におけます珍しい三大遺物を紹介します。



No.450遺跡の「魚骨押捺文」土器とイワシ



No.116遺跡の有溝砥石とシベリアの矢柄研磨器



No.325遺跡のU字形竈先と燵

昭和60年度の三大遺物

お知らせ

発表会・展示会

次の遺跡研究発表会と展示会が行われます。

- 魚骨押捺文土器 No.450遺跡出土でイワシの骨を押しつけて土器に文様をつけるという縄文時代前期の珍しい土器です。
- 有溝砥石 No.116遺跡出土で、矢がらの形を整えるのに用いられたものです。縄文時代草創期に見られる数少ない砥石です。
- U字形竈先 No.325遺跡出土で、木製の柄をつけて平安時代に農具として使われました。
- 第11回東京都遺跡調査研究発表会 三月九日（日）九・三〇ー 於杉並区高井戸地域区民センター
- 東京の遺跡展 二月二十六日～三月十日 於銀座ソニービル

出版物の御案内

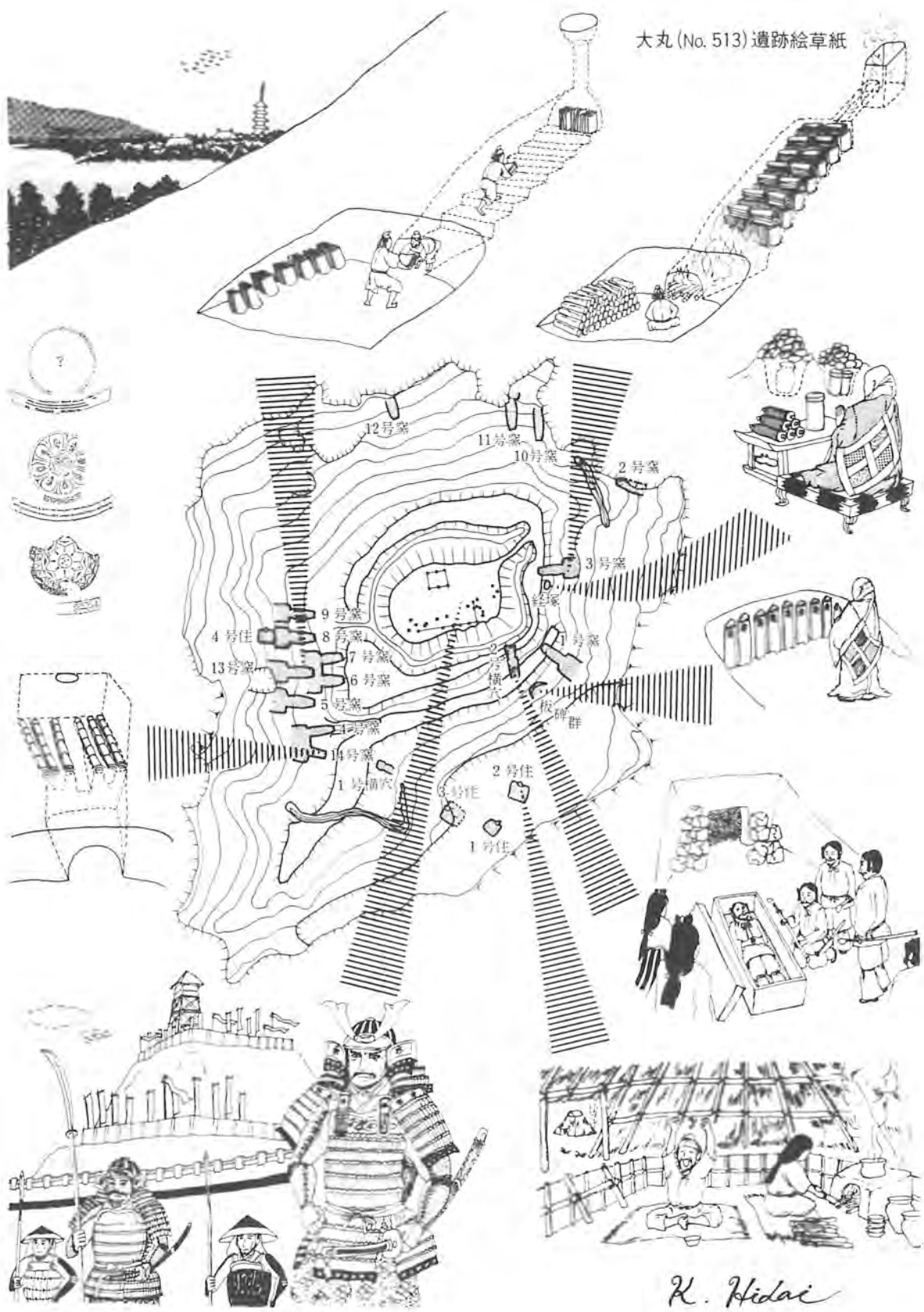
当センターでは左記の報告書、研究論集を頒布致しております。詳細につきましては、センター調査課までお問い合わせ下さい。

- 1、「研究論集Ⅱ」 頒価五百円 送料二百円
- 2、「研究論集Ⅲ」 頒価五百円 送料二百五十円

- 3、「多摩ニュータウン遺跡Ⅰ No.513遺跡Ⅰ」 頒価五百円 送料二百五十円
 - 4、「多摩ニュータウン遺跡Ⅱ 昭和57年度」 頒価二千八百円 送料千二百円
 - 5、「多摩ニュータウン遺跡Ⅲ 昭和58年度」 頒価四千円 送料千二百円
 - 6、「多摩ニュータウン遺跡Ⅳ No.769遺跡 奈良・平安時代編」 頒価五百円 送料三百円
- ▼新施設で初めての新年を迎えました。今年は、またもう一つ新たに「縄文の村」（仮称）が隣接の遺跡に誕生する予定で、植生など自然景観を含め復元される当時の集落など遺跡庭園の内容は、おつて本紙でご紹介します。（千村）

発行
財団法人 東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合1-14-2
☎ 0423-73-5296
0423-74-8044
昭和61年1月1日

大丸 (No. 513) 遺跡絵草紙



文化財講座<5>
見えないものを探る

前号のA4Vで、発掘調査によって手に入れることのできるものは、壊れること、腐ることを免れて今日まで残ったものに限られるということ述べた。今回は、考古資料というものがもともとどのような性格のものであるとするならば、どのような推理を働かせるべきかと、当時の生活が復元できるかということについて、実例をあげて考えてみることにしよう。

検討の素材は、この地域における古代から中世にかけての動きについてである。特にこの時期を取り上げたのは、これまでであった集落が、この時期、この地域から忽然と姿を消すからである。この現象は、一見この地域に人が居なくなったようにも見えるが、実はこれまで目に見えない形で残っていたものが形の残らないもの、残りにくいものに姿を変えていったと考えることによつて、つじつまが合うのである。

先ず住居跡についてであるが、これは竪穴式の住居が痕跡の残りにくい平地式の住居に交替したと考えることによつて説明がつく。西日本では関東地方よりも早い時期に平地式に替つており、この地方でも、以後、竪穴式が採用されたらしい形跡がないから、ほぼこの時期に竪穴式から平地式への交替があったと考えて矛盾がない。

次に遺物についてみてみると、これも残りやすいものから残りにくいものへの材質の転換があったと考えることによつて説明がつく。これまでの須恵器や土師器の坏・埴の類は、絵巻物にも見られるように木製の杯や椀に取って替られた可能性が強い。また、土師器の甕は主に煮炊きの道具として用いられたが、これは鉄鍋に替つた可能性が強い。この時期は造りつけのカマドが無くなって置きカマドや三足付鍋が出現し、煮炊きの道具が目まぐるしく交替する。しかもこれもすぐ無くなってしまふから、No. 91遺跡などから出土している鉄鍋の存在を考えると、この地域においても、鉄製の鍋が非常に短期間のうちに普及していったものと考えられるのである。No. 390遺跡で発見された溶鋳炉も鉄鍋を生産した工房であった可能性が強い。鉄鍋は形の残りやすい遺物ではあるが、伝世することによつて、また、壊れても再び原材料として再利用されるために我がの前にはなかなか遺物として姿を見せることがなかったのではなからうか。

考古資料は形の残りにくいものという前提にたてば偶然の発見にたよることなく、このような新しい視点からのアプローチも時として必要なのである。(可児)

多摩の歴史を訪ねて⑤

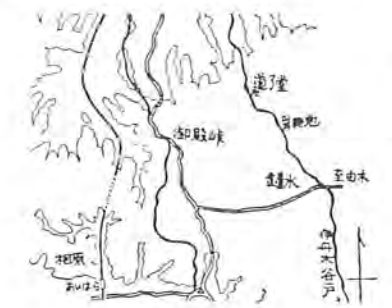
秩父事件は御殿峠から

御殿峠は相州街道の一部をなし、中世より現代に至るまでの交通の要所となってきた。この御殿峠こそ、多摩地方の近代史上、大きな悲劇を生む舞台となったのである。

明治十七年、日本は新政府の財政引き締めにより、大きな不況の黒雲に覆われていた。無論、多摩地方もその例外ではなかった。増税、土地を担保とした大きな借金、さらにデフレ政策により農作物の価格は落ちてゆき、人々は不況の底に辿った。

そして、この多摩地方の嵐は、二ヵ月後の明治十七年十一月の秩父事件へと波及していったと言われる。

現在の御殿峠周辺は、近代的な大学の建物設置等により、当時を偲ぶ事は難しい。(比田井民子)



古代の窯跡群

No.513遺跡のある稲城市大丸から、多摩市連光寺にかけての川崎街道に沿う谷は瓦谷戸と呼ばれ、昔から古代の瓦が出土することが知られており、現在ではこの谷戸中に、いくつかの瓦窯跡が存在することが確認されています。No.513遺跡はこの瓦谷戸の入口にあたり、瓦谷戸窯跡群の一角を占めるものです。

No.513遺跡からは14基の窯跡が発見されました。窯は時期ごとに、東・西・北の3カ所に分布します。

東斜面からは1・2・3号窯の3基の窯が発見されました。このうち2号窯は崖面にあり、現状では全掘調査が不可能で詳細は不明です。しかし窯体の一部を調査することができ、その結果、未焼成のまま埋没したトンネル式の窯であることが判りました。1号窯もトンネル式の窯で、煙道は窯尻の壁面からそのま

ま斜めに延びて排煙口へ向うという構造です。この窯は本遺跡の窯のうちでただ1基、瓦のほかには須恵器も焼いています。操業当初は焼成部が瓦の窯詰に適した、階段付の瓦窯でしたが、数回の繰業の後、階段部分に粘土を貼り付け、起伏のない窯底にし、須恵器焼成を目的とした構造へと改築されていきました。須恵器は最終操業時に焼かれたものが多数窯底に残されています。器種は蓋付の高台の付いた坯を主体とし、長頸瓶・碗・皿などがあり、この須恵器の年代観から、この窯が奈良時代前半（8世紀前半）に操業されていたことが判りました。3号窯は全長約7mと小ぶりですが、やはり階段付のトンネル式の窯で、煙道の構造も1号窯と同じです。操業回数は2回ほどと少ないものでしたが、ひき続き操業しようとして、まだ焼いていない瓦を窯尻から並べている最中に天井が崩れたも

のか、検出された窯底面には未焼成の瓦が粘土塊として散在し、その下方には前回の焼成で破損した瓦が散乱していました。この瓦の中には1号窯から出土したものと同じ4重弧文の軒平瓦が含まれており、このことから1号窯と同時期であることが判りました。

西斜面からは4・7・9号窯13・14号窯の8基の窯が発見されました。このうち14号窯を除く7基の窯は、すべて1・3号窯と同じく、階段付のトンネル式の窯です。しかし細かくみると、1・3号窯と比べこの西側の窯は、焼成室の傾斜角度がゆるやかであること、煙道は窯尻の天井からほぼ真上にくり抜かれていることなどの相違点もみられます。14号窯は本遺跡の中で唯一の有牀式平窯です。しかし火入れされておらず、未焼成の窯です。この窯は燃料を焚く燃焼室と、瓦を焼く焼成室が区別され、通煙孔を通じて焼成室に火が入る

構造になっています。焼成室には瓦を敷き重ねて教条の長い台（牀）を造り、この上に瓦を並べて焼くようになっていきます。本窯は未焼成のため、この窯で焼かれた製品はありませんが、牀を造るのに用いられた瓦は、この14号窯と前庭部を共有し、並んで存在する4号窯で焼かれた瓦であることから、4号窯とほぼ同時期であろうと思われる。西側の窯で焼かれている製品は、4号窯で瓦と埴（煉瓦）が焼かれているほかはすべて瓦です。この瓦の中には武蔵国分寺創建期のものと考えられている単弁8葉蓮花文の軒丸瓦と、3重弧文の軒平瓦が含まれており、このことから、これら西側の窯は、多少の時間幅はあるにしても、いずれも武蔵国分寺創建期の奈良時代中頃（8世紀中頃）に操業された窯と考えられます。また8号窯の灰原の下からは竪穴住居跡が発見されました。したがってその時期

は8号窯よりは古いのですが、住居内のカマドを作るのに丸瓦を使っていることなどから、いずれかの窯と関連があるのではないかと考えています。また住居内からは北武蔵地方の窯場で焼かれた須恵器蓋が出土しました。当地と北武蔵の窯場との関連を考えると重要な資料と言えます。

北斜面からは10・11・12号窯の3基の窯が発見されました。いずれも階段付のトンネル式の窯で、煙道は西側の窯と同じく、窯尻の天井からほぼ真上にくり抜かれています。しかし焼成部は1・3号窯のように急な傾斜角度をもっていません。これらの窯からは剣菱文様蓮花文の軒丸瓦と均正唐草文の軒平瓦が出土しました。とくに剣菱文様蓮花文の軒丸瓦は、武蔵国府関連遺跡や川崎市菅寺尾台廃寺、調布市染地遺跡などで同様のものが出土し、年代的には8世紀末から9世紀初頭とされています。

大丸城跡

多摩丘陵の東端に近く、多摩川へと張り出す尾根の先端に位置する当遺跡は、江戸時代に書かれた「新編武蔵風土記稿」に「土人これを城山と呼ぶ、登り一町餘の山にて、上に堀の跡とおぼしき所あり」と記され、古くより大丸城跡として知られていました。しかし、この城を誰が何時築いたものなのかを示す記録はありません。ただ、多摩川の対岸の府中地域、南方の小沢城では南北朝時代から戦国時代にかけ何度か戦いが行われ、その度にこの地が地理的にも重要な位置を占めていたといえます。発掘調査は、57年と今回の2度にわたり行われ、築造年代は（出土遺物が少なく）今も検討中ですが、城跡の構造等はほぼ全様を知ることができました。そこで、大丸城跡の概略について紹介したいと思います。

内郭を置く単郭式とされる形式です。山頂の内郭には東側に柵列、多摩川に面した西側に物見台と見られる建物跡があり、出入口付近には飛礫でしょうか礫が散乱していました。この内郭の外側には空濠が廻り、いづれも山を削り造られ、削平した土壌を斜面に盛り帯郭を築いています。東斜面ではこの帯郭が2段構えに整地され、下段は西南へと延び堀め手と思われる尾根頂部の郭へと通じています。ここには、内郭側から土塁、柱穴群、横断する濠が造られています。また、虎口と思われる内郭北側には、下方に狭い郭が設けられ、やはり横断する溝が造られています。なお、城の存続期間については、内郭の柵列、濠、斜面の盛土等によって比較的長期間機能していたことが伺えます。この様に、大丸城は防戦的な施設・構造をもち、内郭からの眺望やその施設により物見の城として築かれたものです。



大丸城跡(東より)

墓跡と供養塔

当遺跡は、古代・中世を通じ墓地や信仰の場として近隣に住んでいた人々の精神生活の一端を表す遺構が検出されています。

横穴墓

7世紀中頃から8世紀頃には、斜面に横穴を掘り墓室とした横穴墓が造られています。地域の有力一族の墓とされる横穴は、古墳終末期と同じく群集し造られますが、ここでは約20mと離れた位置に2基が存在しているだけでした。また2号墓では、墓室を塞ぐ閉塞石が除かれ墓前域に散乱し

ていました。出土遺物も、1号墓では土師器鉢、2号墓で須恵器壺が墓前域より検出されましたが、遺骸を納める玄室では副葬品・人骨は出土していません。このような一般的な存在形態と異なる状況の示す意味は判りませんが、或いはこの後に営まれる窯業によって墓域を拡張・存続し得なかったのかもしれない。

墓跡・経塚

鎌倉時代以降と思われるますが、隣接し築かれた3基の石積み遺構が検出されています。この内の2基は、12世紀後半から13世紀前半頃に常滑と渥美で焼いた蔵骨器が納められた墓跡でした。また残る1基には、経筒2本が納められ、中には経巻が残っていました。これは平安時代以降、末法思想の影響を受け、仏教が滅んだ世に經典を残すために造られた経塚ですが、ここでは墓跡を伴うところから埋葬者の追善供養が目的なのかもしれません。

板碑群

当遺跡では2ヶ所で出ています。板碑は、表面に仏を表す梵字や年号等を刻んだ塔婆であり、関東では埼玉県秩父産の青石を用いています。城跡の虎口に於ける付近で出土した一群は、15世紀の銘をもつ約30枚で、位置からみて戦没者の供養のためかもしれません。また、約20m南西で出土した一群は、14世紀の銘をもつ28枚が置かれ、床には数ヶ所に火葬骨がまかれ、五輪塔の断片も出土しており、やはり何らかの供養塔として周辺より集めて来たものでしょう。（栗城・竹花）



板碑群